

黙示録

冠龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文明の崩壊は目前に迫っていた。

過去と現代と未来が混ざり合う。それらは互いに牙を向き、世界の有り様を一変させた。

野を潰し山を崩す。爪痕を大地に刻みつけ、木々を薙ぎ倒して谷を超える。小川も大河も死体で堰き止められ、代わりに血の河が築かれる。

村も町も都市も、一切合切を塵に還し、より多くの御首を上げた者だけが生き残る。

時を超えた最終戦争の幕が上がった。

目次

逃亡	18
蹂躪	13
異変	1

異変

けたたましいサイレンがエサの時間を告げる。これは数多の怪物にとつて、夕食を知らせる親切なベルとして聞こえた。だがこれは滅びをもたらす厄災の鐘の音でもあった。何故ならこのサイレンは生物の同士討ちを引き起こすため、ARC職員のニック・カッターたちが仕掛けた罠だったからだ。目的は収容された生物たちを共食いさせ、差し迫ったラグナロクの到来を防ぐこと。

『腹が減った』と言わんばかりの鳴き声や、慌ただしく向かってくる足音は、もうじき訪れる血と死の宴の前奏だった。

整った前奏に乱れが生じる。

この瞬間に歴史が変わろうとしていた。

きっかけはほんの些細な、だが耳障り極まりない小競り合いだった。

サイレンを聞きつけたラプトルが現場へと急行する。小さな身体に見合わずバイクに匹敵するスピードで疾走できる彼からすると、収容部屋へ一番乗りを決めるのは朝飯前だったことだろう。脇目も振らず駆けるラプトルの鼻面を『影』が掠めた。

薄暗い廊下を2つのシルエットが交差する。

さすがの動体視力で邪魔者の姿を捉えたラプトルは身を翻し、壁や床を蹴って相手から即座に距離を取った。すると奥から不気味な外見をした異形の哺乳類が姿を現した。ラプトルはその姿を物珍しげに思いながら鋭く見定めようとする。

『影』の正体は世の理から外れた狩人、未来の捕食動物（コウモリ）だった。

一見すると病的なまでに痩せ衰えているが、それでいてラプトルと同等かそれを凌駕するスピードを發揮できる。しかも体高では2m近い。これではラプトルが接近戦を挑もうとしても、先に相手の間合いに入ってしまうだろう。これでは容易にシツクルクローを行使できない。それでもラプトルは空腹だったため、道を開けるよう力の限りに高鳴きをした。大抵のライバルはこの耳を劈く叫び声を嫌って

退散するが、ことコウモリに限っては違った。激烈な警告がコウモリの狡猾な知能の奥に秘められた殺戮と破壊の衝動を呼び覚ます。先手はコウモリが取った。備え付けの貯水タンクから飛び出し、先手必勝とばかりにラプトルに身構える暇を与えない。跳躍の勢いを乗せ腕を天高く掲げる。すると異様な唸りを上げた腕が巨大な鎌となり、ラプトルの背中を目掛けて振り下ろされた。ところがコウモリにとってラプトルの対応は、予想外なほど敏速だった。まず初撃をバツクステップで躲し、続く追撃の二撃三撃を壁を跳ねて切り抜ける。コウモリは初撃で決めるつもりだったが、その目論見は根本から覆された。それでもコウモリに動揺はない。思考を切り替えて追撃に集中する。勢いを纏ったまま返す刀で放たれた四撃目は、ようやくラプトルの正中線を捉えた。さすがのラプトルも今度ばかりは躲す余裕がない。せいぜい肩を犠牲に致命傷を避けるしかないと思われたが、ラプトルには奥の手があった。

鉛色の光芒が両者の目と鼻の先で火花を散らす。

これは比喩的な表現だが、現実にもこれと遜色ない光景が展開されていた。

ラプトルは両断される寸前で後ろに跳び退いていた。それでも鉤爪の射程範囲からは脱出できそうにない。そこで彼は跳ねた拍子に浮き上がった後脚を加速させた。

元よりこれが狙いである。ちやうど向かってくる鉤爪を相殺するかたちで、悪名高いシツクルクローを繰り出した。しかも相殺は2つ目の狙いに過ぎない。本命はコウモリの膨れ上がった頭部。そこに秘められた大脳を貫きさえすれば確実に敵の息の根を止められる。つまりラプトルは初めから逃げに徹していた訳ではなかったのだ。つまりコウモリは、一瞬にして逆王手をかけられたことになる。常識からすれば、ここは一時撤退しかありえないが、さすがに兵器として生み出されたコウモリは頭のキレが違っていた。

コウモリが追撃に放ったはずの腕を強引に引き戻した。ラプトルは構わず脚を呻らせる。そして狙撃すべく突き出されたシツクルクローの刃の部分を的確に捕えた。エッジとエッジが重なり、ちやうど

剣の勝負で言うところの「鏢迫り合い」が起こった。しかし彼らは数億年に渡る闘争のスペシャリスト。その次元は人間のそれを遙かに超越している。安定した拮抗状態は一瞬にして崩壊した。先に跳躍中のラプトルが体勢を崩し、コウモリの爪を足掛かりにして数m後方に蹴り出した。これだけならラプトルは引き下がったように思えるが、実際には金属製の防火シャッターを蹴り碎いて余りある衝撃を、コウモリの鉛筆のような細腕へ叩き込んでいた。関節が音を立てて軋み、コウモリの腕は壊されかけた。だがコウモリは腕をへびのように素早く畝ねらせて衝撃を受け流し、痛手を最小限に留めた。刹那の狂いも許されない渾身の受け技によりラプトルの目論見も外れた。これにより長期戦は避けられなくなる。

ここでコウモリが動く。突如として踵を返し、壁の配管を足場に蹴ってサイレンの在り処へと急いだ。つまりコウモリはこの場でラプトルを始末するのではなく、まずは自身の有利なフィールドである収容部屋へと戦場を移すことにしたのである。あの鳥とトカゲの間の子のような生物は、かなり腕の立つ強敵と判断してのことだった。それでも三次元的な活動が可能な収容部屋ならば、思いもよらぬ方向からの奇襲で奴を仕留められるだろう。

だが足早に通路を抜けるコウモリには、一つだけ大きな誤算があった。それは当のラプトルが深追いつて来ないことだった。ラプトルの本能は追撃を命令していた。しかし漁夫の利を狙った他のライバルに遭遇する可能性が高いと判断し、賢明にも矛を収めた。どうにも消化不良に終わった決闘だったのか、不満は迂回路を駆ける間も喉の奥から溢れていた。

こうして運命の歯車は、ここで大きく、そして致命的なまでに狂ってしまった。

収容部屋の一番乗りはコウモリとなった。更に彼らの「創造主」と遭遇する。

生物を共食いをさせようと画策したカッター達は、今まさに地獄の窯に錠を下ろそうとしていた。ヘレンがコウモリを目の端で発見し、

冷や汗をかきながら急いで壁のスイッチを押す。ブザーの音と共に扉が閉じ始め、あわやへレンは身を滑り込ませた。コウモリはその気になればへレンの脱出を阻止して八つ裂きに来たものの、ここは敢えて黙ったまま見送るだけに留めた。連中が携帯する銃火器を警戒していたというのもあつたが、実際には後続のラプトルなどを警戒していたからだ。

やがて次から次へと古今東西の怪物たちが集い始めた。『餌はどこだ』と言わんばかりに不満そうな声や鼻息を漏らしている。しかしダクトからは一向に餌は落ちてこない。やがて緊張が限界に達し、彼らが互いに殺し合うのは時間の問題だった。

カサカサと乾いた足音を伴いながらアースロプレウラが收容部屋へとやって来た。すると耳障りだとも思ったのか、入口付近で寝そべっていた水棲霊長類が敵意を剥き出しにして唸り声を上げた。これに対するアースロプレウラの反応は舌を巻くほど素早かった。伸びきった身体を瞬時にくねらせて水棲霊長類の背後を取り、慌てて迎撃しようと振り向いた水棲霊長類の首へハサミのような大顎を突き立てた。しかし水棲霊長類もただでは咬まれようとせず、咄嗟に筋肉質な尾鰭を振り上げて即席の盾とした。分厚い表皮を破ってアースロプレウラの大顎が奥へ奥へと食い込む。ここでアースロプレウラは早期に決着をつけるべく、必殺の毒針を突き出した。口から先端の鋭いカテーテルのような細い管が飛び出し、水棲霊長類の重皮を穿く。ところが全てがアースロプレウラの思惑通りではない。管が思ったように通らないのだ。サメの攻撃すら凌ぎ切る水棲霊長類の皮膚は想像以上に分厚く、毒針は目立った血管や筋肉にまで到達しなかった。命拾いした水棲霊長類がここぞとばかりに反撃する。本来なら動きの鈍さが仇となる彼が全力で攻撃できる機会などそうそうない。しかし今だけはアースロプレウラが文字通り手の届く距離にいる。柔軟な前鰭を曲げて力を蓄え、グツと尾鰭に力を加えてアースロプレウラの懐へ踏み込んだ勢いを利用して本能のままに殴りつけた。華奢な外骨格は一撃壮絶な変形を見せた。

……かに思われた。しかし実際には、アースロプレウラは間一髪の

ところで脱力をし終えていた。咬筋だけを残して他の部位から無駄な力を抜く。するとアースロプレウラの身体は節足動物らしからぬ柔らかさを見せ、水棲霊長類による渾身の殴打は一切の効果を失った。そして致命的な隙が生まれる。そこからのアースロプレウラは、相も変わらず電光石火の動きで追撃に打って出た。周囲のコウモリを寄せ付けない怒濤の攻めで愚かな水棲霊長類をズタズタにしていく。その圧倒的な怪力をもつてすれば、例え相手が自身を上回る体重の持ち主であろうと的に過ぎない。それどころか狙いやすさで言えば随一の楽な標的である。やがて四肢を咬み折られた水棲霊長類は、背中を咬まれたまま物凄いスピードで振り回され、やがて週末のゴミ袋のように無造作に放り投げられた。向かう先には檻の支柱。グシヤリという音がコウモリの鼓膜にへばり付くとともに、元からグロテスクな顔面が余計に目も当てられなくなった。皮膚の張りをなくし、百通りの呪詛を含んだ呻きを残しながら、水棲霊長類が最初の犠牲者となった。不意に訪れた永遠の沈黙。離れた場所で同じように寝そべっていた同胞は、この急展開に付いていけず困惑を隠せない。場はアースロプレウラが支配した。重量級の相手に細身かつ単身で挑みながら、一歩も引かずに屠った様はまさに不退転の化身と言える。

とはいえ他の生物も黙ってはいない。

子供のスクトサウルスは運悪く戦場の真っ只中にいた。本当ならば鼻を突く狩人の匂いを嗅ぎつけた時点で、そそくさと逃げ出したいところだったが、ちょうど引き返そうとしたところで新手のコウモリに遭遇してしまった。幸いコウモリはサイレンに気を取られていたため、直後に教わることはなかった。それでも今の自分が相当に危うい状況なのは、いかに脳の小さなスクトサウルスでも分かっていた。であれば生き延びる策を講じる必要がある。

幼いが故の自由な発想でスクトサウルスが編み出したのは、天敵たちの意表を突く作戦だった。

水棲霊長類を片付けた直後のアースロプレウラは、突如として地面の振動を感じ取った。アースロプレウラは咄嗟にサソリの宣戦布告

を予期した。というのもサソリは先程から捕脚を忙しく振り回しており、今にも乱闘へ加わりたいという魂胆が見え見えだったため、先の戦闘中もずっと警戒していた。だがサソリが乱入すると分かっていたら世話はない。アースロプレウラは水棲霊長類を翫びつつも、サソリに対して有利な位置に移動していた。狙うは比較的武装の少ない腹部後方。そこを噛み割って即座に沈める。不死身のような節足動物の殺し方は、同じ節足動物である自分が最も熟知している。そうしてアースロプレウラは、勝ち誇りもそこそこに突撃してきた「巨体」を迎え撃った。

ところが目の前に現れたのは、他でもないスクトサウルスの子供だった。

スクトサウルスの子供は一か八かの賭けに踏み切っていた。このまま座して死を待つぐらいであれば、いつそ僅かな可能性に賭けて突破を図る。そのためには周囲の血に飢えた捕食者を一匹残らず怖気づかせる必要があった。怖気づいてさえくれれば、後はさながら古の紅海のように勝手に道を作ってくれるだろう。そして悠々と戦場を後にする。まるでレッドカーペットを歩く大物役者のように。

そして子供のスクトサウルスが目を付けたのは、今この場で最も勢いのある戦士。つまりアースロプレウラだった。この奇蟲さえ負かせば、残った有象無象は勝手に道を譲るであろうことは、容易に想像できた。

となれば迷っている暇はない。思わず勝ち誇っている今が唯一にして最後の機会である。土管をそのまま生やしたような脚を動かす。進む先には背を向けたアースロプレウラ。

派手な衝突は怒らなかつた。

スクトサウルスの奇襲は完全に成功した。不意に降ってきた2トン近い巨体が、無防備に伸びていたアースロプレウラの尻尾を踏み潰す。二股に別れた尻尾の一振りには、いとも簡単に千切れてしまった。電化製品のコードを数倍太くしたような尻尾がビチビチと跳ね、アースロプレウラは鈍痛を感じて身を捻り上げた。そして尾の感覚が半

分になっていることに気づく。途端に猛烈な怒気が目の前の巨大爬虫類へと向けられた。見たこともない相手だが、することは何時もと大して変わらない。傷口から薄汚れた雫を散らしながら、アースロプレウラは敵の側面を急襲した。当然スクトサウルスは危険な頭部を踏み潰そうとする。しかしアースロプレウラの攻撃は巧妙なフェイントに隠されていた。頭部が脚と床に挟まれる直前でアースロプレウラが胴をくねらせる。90度に迫る角度で曲がった身体はスクトサウルスの股を抜け、なおも伸長を続けた。そして真反対の脇腹へ顔を出したところでようやく止まる。アースロプレウラとしてはこのまま脇に噛み付いてフィニッシュといきたかったが、スクトサウルスの反撃は更にその上をいった。アースロプレウラの大顎がスクトサウルスの鱗を刺し貫くのと同時に、スクトサウルスもまた必殺の一手を打っていた。それは転倒。この字面だけでは理解しにくいだが、これはアースロプレウラとつて最悪の反撃だった。さっきとは違い、今度はスクトサウルスのワイン樽のような腹全てが、真下のアースロプレウラを押し潰そうと迫ってくる。面積が広いため先程のように間一髪で避けるのは不可能。ドスンと腹を震わせるほどの振動と衝撃が部屋全体に伝わる。これにより数頭のコウモリが天井から滑り落ちそうになった。だが戦況は見物人のコウモリごときに構ってはいられなくなっていた。

誰もがアースロプレウラの敗北を予感した。特にエコーロケーションによって周囲を感知するコウモリ達は、反響の具合からスクトサウルスと床との距離を導き出し、アースロプレウラが圧殺されるのは確実だと踏んでいた。そしてコウモリ達もまた策を練っていた。アースロプレウラが敗れたとあっては、次に幅を利かせるのは十中八九勢いに乗ったスクトサウルスの子供。だが愚鈍な巨人にいつまでも覇権を握らせておくのは面白くない。ここは見せしめとして数の暴力のままに子供を惨殺するのが良いだろう。上手くいけば周りのサソリやスミロドンへの威嚇にもなる。

そんなドス黒い計略を秘めた10頭近い切り裂き魔が天井に潜んでいるとは夢にも思わず、スクトサウルスは足元の長蟲を壊しにか

かった。

ところがアースロプレウラも甘んじて死を受け入れようとはしなかった。なりふり構わず身体を引っ込める。というよりも身体を軋ませながら真逆の方向へ引き曲げた。ちようどもチが撓るように再加速したアースロプレウラは、間一髪のところでは必殺の一撃を躲した。身体能力の限界を超えた行動には、当然のように代償が付いて回る。腹が床を擦れた拍子に歩脚の数本が千切れて吹き飛ぶ。それでも背に腹は代えられない。しかも今回の回避は勢いを増幅させたため、回避後にも反動を押されられない。スクトサウルスの落下地点を大きく過ぎたアースロプレウラは、そのまま降下を始めていたコウモリの群衆へと激突した。フルスイングでコウモリの一頭が吹っ飛ばされる。折れた牙が宙を舞い、さしものアースロプレウラも数瞬は意識が遠のいた。

この目まぐるしく戦況の変化を予測していた種が1種類だけ存在した。

それは一步下がった位置で機会を伺っていたラプトルだった。ラプトルは抜きん出た動体視力を持っている。そのおかげで彼らは、アースロプレウラが見せた超常的な回避を事前に予測できていた。このことは彼らが先手を取れることに繋がる。流れを掴んだのはスクトサウルスでもなければ、コウモリ達でもなかった。ほぼ同時にコンクリート製の床へ爪痕が刻まれ、盗賊2頭がアースロプレウラを中継地として、流れるようにコウモリへ攻撃を仕掛ける。踏み台にされたアースロプレウラはスクトサウルスの真上へと落下した。そして切り裂き魔による空中戦が始まった。打ちつ打たれつ揉み合いながら、挙げ句に斬ったそばから斬り返される壮絶な剣舞。勝負はまたしても引き分けに終わった。ラプトルとしては勝てるかと踏んでの攻勢だったものの、コウモリ達の機動力は生半可なものではなかった。

水棲霊長類の暴挙に始まり、切り裂き魔の空中戦によって幕を下ろした前哨戦の間中、人知れず動いていた者がいた。それは收容部屋に一番乗りしたあのコウモリ。

騒ぎなど知ったことか、と争乱を極める地上を後にして、檻の支柱

を飛び越え目的の場所へと辿り着いた。近くのスミロドンを追い払い、壁へと手を掛けた。反響により物体の形状や位置は把握できている。それは記憶どおりの位置に存在した。躊躇いなく手に力を込める。触れていた「物体」が奥へと少しだけ動いた。するとブザーが発動する。これも記憶どおりだ。

収容部屋からコウモリ1頭分の心拍が忽然と消えた。

今にも血の海へと身を投じようとしていたスミロドンの鼻孔へ、爽やかな空気が流れ込んできた。すぐに在り処の方へ振り向くと、そこには先程まで存在しなかった「出口」が存在していた。流石に知能の高い哺乳類であるスミロドンは、すぐにこの意味を理解した。出口の前で改めて匂いを嗅ぐ。そこからは忘れがたい日光の香りと、僅かなコウモリの匂いがした。それは奥へと続いている。彼の決断は早かった。

力による脆い均衡が崩壊しかかっていた中央部を、爽やかな空気が包み込んだ。復讐の波に揉まれようとしていたコウモリ達が鼻をひくつかせ、起き上がったスクトサウルスが周囲に目を凝らす。支柱に巻き付いていたアースロプレウラは触覚を波打たせ、水棲霊長類が顔をもたげ、ラプトルとスミロドンは手を止めて目を光らせた

門は開かれていた。

生物が我先にと外を目指す。あつという間に収容部屋には成体のスクトサウルスだけが残された。体格的に無理のありそうなサソリすら脱出していたのは、彼らが捕脚を使って中途半端に開かれたドアを完全に破壊してしまったからだだった。

二度と太陽を拝むことなく散るだけだったはずの命が、今再び陽の光の元へと姿を現した。

中でもラプトル、コウモリ、スミロドンの3種はずば抜けて迅速だった。やおら車を出そうとしていたカッター一行へと追い継ぐ。予想外の事態にステイブーンが急いで車を出した。慌ててカッター

が操縦を変わり、ステイブンは携行して拳銃を発砲する。けたたましい銃声が響くが、荒い運転を繰り返す車上から俊敏なラプトルやコウモリを、しかも拳銃一丁で狙撃しようとするなど到底無理な話だった。狙いはあくまでも威嚇。ズガン、と最後の一発を撃ち終え車内に顔を戻すステイブンだったが、そのタイミングを狙って2頭のコウモリが踊りかかった。合金で作られた頑強な車のボディを3発とかげずに穴ぼこだらけにし、サイドミラーを叩き割って後方の予備タイヤを破裂させる。さすがにコウモリといえども走行中の車輪を攻撃するのは危険極まりない。そこが弱点なのは分かっているが、今は直接手を出すべきではない。2頭は破壊の限りを尽くした末に車上から飛び降りた。そこへ新手が飛びつく。今度はラプトルだ。ラプトルはコウモリと違って後先を考えようとはしない。既にコウモリによって破損しかかっていた窓枠のフレームを蹴りの一発で断絶させる。余波でフロントガラスの右半分がヒビ割れ、まるで霜が降りたように白く曇った。当然ハンドル操作に支障をきたす。カッターが慌ててハンドルを切り回したため、尋常ではない程の負荷がラプトルと車内の人間を襲った。しかしラプトルは四肢の爪を全力で食い込ませて耐える。やむを得ずステイブンが半壊した窓から拳銃を伸ばしてラプトルを撃った。急いでいたため装填数は少ない。結果的にラプトルは回避に成功した。そして攻撃したら反撃されるのが世の常。先程コウモリに仕掛けたように、今回もラプトルは跳躍の反動を利用して最大の武器であるシツクルクローを最高出力で開放した。狙いはフロントガラスの奥に見えた人影。ヒビの集中点を的確に打ち抜き、奥に隠れていたヘレン・カッターの肩を削いだ。悲鳴と鮮血が車内のシートを黒々と染める。ここでラプトルは追い打ちをかけるようにしたが、さすがに貧弱な人類であっても、それなりに場数を踏んでいれば彼らと互角に渡り合うことが出来る。咄嗟にカッターがアクセルを踏み込んで急発進した。危険を感じてラプトルは暴走車両から離脱を図る。ヘビの数千倍は不気味な息を漏らしながら、ラプトルは走り去る車を凝視していたが、やがて追いついてきた相棒を見やった。ようやく自由を取り戻した2頭は顎と顎を擦り合わせ、信頼

と愛情を深める。熱い仲に水を差すように近くのスミロドンが唸った。2頭は鬼か般若かという形相のまま、絶対零度の視線を向ける。この貫くような視線には猛獣スミロドンとて敵わず、さすがと退散した。とはいえスミロドンにも仲間はある。ドラム缶の上で周囲を見渡していた別のスミロドンがこちらへ近付いてきた。2頭の間には僅かな緊張が走る。下手をすれば一触即発の状況だが、とどの詰まりこれは杞憂に終わった。結局のところ、未知の世界に放り出された今となつては、確実に信用できるのは隣にいる同族のみ。ここで無闇矢鱈と敵を作るようでは、この先の長く険しい戦いを勝ち残ることなど出来ないだろう。見ればシルル紀のサソリも2頭揃って手頃な廃車を相手に捕脚の試し振りをしている。こちらにも数発でガラクタの山を築いてみせた。先陣を切つたのはコウモリの一部。そしてペアを組み終えたラプトル、スミロドン、サソリもその後が続いた。

彼らの感覚器は遠く離れた獲物の存在を既に探知していた。エコーケーションによる広範囲索敵が可能なコウモリが廃屋を縦横無尽に跳ね進む。次いで走行性能の高いラプトルが地上を隈なく探索して取り零しをなくした。狩り出されたのは九死に一生を得たはずのリークの部下5名だった。彼らは収容部屋の騒ぎが激しい内に非常口から逃げ出し、近隣の森に潜って救援を待っていた。辛くも逃げ延びたと思つた矢先に待ち構えていたのは、復讐に燃えた無数の怪物。もちろん逃げるしかない。だが藪に逃げ込もうものならスミロドンに喉を噛み裂かれ、手持ちの銃で応戦しようとしてもサソリの甲殻には歯が立たなかつた。やがて銃撃を耐え抜いたサソリが無双と呼んで差し支えない戦いを見せつけ、結果として森で1名がラプトルによって、そして残る4名が逃げた先の駐車場と屋外倉庫にて、化物の稽古台にされるといふ哀れな末路を辿つた。

後続のコウモリやアースロプレウラも蹂躪に加勢し、あわよくば分け前にあずかろうとする。

最後の1人がサソリの捕脚によって八つ裂きにされ、悲鳴が周囲の狩人を呼び寄せた。

溢れ出た鮮血と臓物が、捕食者達の心理の奥底に秘められた破壊の

衝動を呼び覚ます。

かくして準備は整った。この世界には数え切れない程の獲物が存在する。それらを一匹残らず振り伏せ、力のままに支配し、世を再び我が物とするため、異形の戦士達は終焉へと続く大きな一步を踏み出した。

《状況》

- ・ 収容施設が陥落
- ・ 大半の生物が脱走

《死亡》

- ・ リークの部下5人
- ・ 水棲霊長類（メス）

蹂躪

リークの部下を除く最初の犠牲は、近隣で個人運営されていた牧場だった。郊外という立地のため、個人経営ながら規模はそれなりに大きい。納屋へ舞い降りたコウモリ達は、そこに飼育されていた十数頭の羊を一瞬にして狩り尽くした。羊たちは数分でボロ布をまとった肉塊と成り果てた。唯一の難点は分厚い体毛だったものの、1頭目でコツを覚えたコウモリ達は、2頭目以降には大して手間取らなかった。

もちろん隣接のウサギ小屋や鳥小屋も徹底的に破壊された。先鋒による蹂躪を目の当たりにした後続は、是非もなく本能を曝け出した。

弱々しい鳴き声が聞こえなくなるや、次に地獄のキャラバン隊が目をつけたのは、屋外で柵に囲われていた十数頭の牛や馬だった。あっさり柵は破壊された。長らく忘れていた死の恐怖に怯え慄いた牛達は、一斉に破壊された箇所へ殺到して血路を開こうとする。もちろん攻撃者が通そうとしない。過去の遺物を前に見かけだけは立派に威嚇を繰り返す牛だが、サソリに対して派手な威嚇は逆効果だった。とりわけ大きなメス牛が仲間を追い散らしながらサソリへ突っ込む。その目には恐怖の色がありありと浮かび上がっていた。とはいえ体重が600kg近い肉塊に体当たりされれば、例えサソリといえども無事では済まない。しかも牛の脚には石のように硬い蹄が備わっている。下手をすれば甲殻を突き破られてしまっだろう。芝生を踏み躪りながら牛は突進する。この瞬間をサソリは待っていた。複数の関節を介して何倍にも威力を増幅された捕脚が、獲物の横腹を見事に捕えた。牛が逃げようとして藻掻けば藻掻くほど、寸分たがわず肋骨の隙間に刺さった棘が奥へ奥へと食い込んだ。するとサソリは何度が獲物ごと捕脚を振り、手頃な姿勢になると牛を地面へと叩きつけた。視覚と触覚のどちらにも凄まじい衝撃が牛の群れへと伝わった。地面を振動が攻撃の威力を如実に物語る。しかし衝撃を理解するまでもなかった。なぜなら同族の中でも抜きん出て大きなメスが、彼ら

の目の前であっさり逆さまになっていたからだ。異様な光景もさることながら、牛たちが目を疑ったのはメスの無残な死に様だった。小さな角の生えた頭部は酷い角度で折れ曲がったまま潰れていた。加えて砕けた頭蓋骨が新鮮な肉の向こうから顔を覗かせている。奥に控えていた群れは見る影もなく瓦解し、散り散りになって血路を開こうとした。それらは当然コウモリ達の排除対象となった。喚き散らす大型草食獣など害悪以外の何者でもない。体重では辛うじてコウモリを上回っていた他の牛も、生物兵器の速攻には手も足も出せない。次々と頸椎を折り砕かれ、多数の犠牲者が荒れ果てた牧場に散乱した。そこへガチョウの首を捻ったばかりのラプトルがやって来る。相変わらずラプトルとコウモリは相容れないようだが、どうやら手頃な標的がいる間に限っては、互いに手出しをしないことに決めたらしい。

紳士協定の元にラプトルが破壊の爪痕を舐め回す。丸々太った親類を放り捨て、そのままこちらもよく肥えた牛の腹へと牙を突き立てた。プシツと血飛沫が飛び、ラプトルの美しい顔面を朱く塗りつける。乳牛の肉は高貴な盗賊の口によく合うらしく、その牙はやすやすと臓腑を切り裂いて喉の奥へと送っていった。一方でコウモリ達は手を付ける前から肉の吟味を行っていた。ちやうどシヤチが魚の脂の乗り具合を調べるのと同じ要領で、エコー結果に基づき良質な部位を探し当てる。どうやらコウモリ達にとってはカルビが好みらしい。爪の一振りで腹を捌き、鮮血の溢れる赤身の肉を齧り取る。数分前まで青々とした草原が広がっていた一帯は、今は紅蓮の広間として鉄臭く芳醇な香りを放っていた。

それでも一部の牛は禍々しい爪から逃げ延びていた。やがて牛の恐怖が伝染したらしく、少し離れた場所で囲われていた馬たちも早々に脱走を開始した。こちらは牛よりも軽やかだった。邪魔な柵もなんのその。健脚の思うがままに大地を駆け抜け、行く手に立ち塞がるものを全て抜き去っていった。それに這々の体で生き残りの牛たちが続く。コウモリの一部とラプトル2頭、それとサソリの片方が牛肉

に舌鼓を打つてくれたおかげで、生き残りには逃げる猶予が与えられた。とはいえ飢えているのはコウモリ達だけではない。

何度目かの藪の超えた先で1頭の馬が姿を消した。家畜たちは五感を研ぎ澄まして異変の兆候を察知しようとする。この間にもモルモットやウサギは茂みの奥へ行方を晦ました。すると茂みの隅から見慣れた同族の足が伸びていた。それは不自然な痙攣を続けた後、か細い悲鳴を残しながら今度こそ完全に茂みの奥へと姿を消した。得体のしれない敵の存在を前に家畜たちは浮足立つ。一瞬だけ木の葉を踏み締める足音がした。それを牛の優れた聴覚が聞き逃すはずがない。巨体を揺さぶりながら迎撃へと動く。次の瞬間、草食動物ならではの広い視界に映ったのは、黄斑の迷彩服に身を包んだ野獣だった。またもや弱者の命が“狩り”取られる。古今東西のどんな名刀にも引けを取らない牙が、牛の下顎から喉仏にかけてを正確に切り貫いていた。下顎に内蔵された柔らかかな舌を引きずり出したのは、かつて人類の庇護下に置かれる前の草食獣を手当たりしに喰らっていたスミロドンだった。その代名詞とも呼ぶべき牙は、今や1万年の時を超えて再び大地を朱に染めあげた。もちろん牛の抵抗は全て空振りに終わる。いくら相手を察知できたところで、数千代に渡って命のやり取りを忘れてきた牛が敵う道理などなかった。これにより群れは大パニックに陥った。絶叫が周りの森へと響き渡る。

算を乱した草食獣により事態は更に混迷を極める結果となった。興奮した牛が別の柵を突き破り、その中で死を待ただけだったロバや豚を解き放つ。狩人にとっては獲物のレパートリーが増えるだけなので万々歳だけだが、追われる身からすれば最悪だった。柵の破壊に乗じて生存の希望は見えたものの、新たに逃げた者も直ぐに混乱へと飲み込まれていった。そして恐怖の波が疫病のように周囲へと伝染していく。あらゆる家畜が野生の牙と爪から逃れんと地を駆け、納屋を破壊し、同胞を異常なまでに煽り立てる。のどかな牧場は一瞬にして選り取り見取りの狩り場となった。

アースロプレウラは破壊された納屋へ足を運んでいた。アースロ

プレウラは素早い持久力に難がある。それに元は湿地や森林に適応した生物のため、そもそも草原は居心地が悪い。そのため彼は、一日の疲れが癒せそうな場所を求めて瓦礫の散乱する納屋へと訪れた。そして良さげな隠れ家を発見した。程よく狭苦しく、それでいて身を振るだけの空間がある。どうやら先客としてウサギの生き残りが身を潜めていたらしいがいくら獰猛でもアースロプレウラは基本的に植物食。大人しく縮こまったウサギには手を出そうとしなかった。

こうして戦乱の中、アースロプレウラの片方は安住の地を手に入れた。

必死に死から逃れようとする豚の群れを無造作に蹴散らしながら、数頭の馬が小川に沿って逃亡を続けていた。どうやら背後に巢食う無数の刃からは逃れられらしい。小川は池に注ぎ込んでいた。疲れ果てた1頭が堪らず喉の乾きを癒そうと池に口を付ける。正にその時だった。水面下から空腹に突き動かされた捕食者が飛び出してきた。馬は反射的に前足で応戦する。使い古された蹄は相手の外皮を強く打ち付けたが、敵の勢いは一切止まらなかった。正体は未来の海を牛耳った水棲霊長類。黄ばんだ犬歯が丸見えの胸元へと突き刺された。体重は互角だが水棲霊長類には地の利がある。滑りやすい水際の土では馬も自慢の脚力を活かせない。そして水棲霊長類は尾鰭に力を加え、水飛沫を上げながら獲物を後ろへ引きずり込もうとした。いつの間にか近くにはいたはずの仲間を消している。救援の見込みが無いと分かり、馬は自力で戦い抜くしかなくなった。幸いにも致命傷は負っていない。焦げ茶の鬣を震わせながら馬は足掻いた。単純な馬力ならば負けるはずがない。下草を押し潰しながら、水棲霊長類の巨体が徐々に陸上へと引きずり上げられる。ここぞとばかりに馬は追い打ちをかけた。水棲霊長類の身体が完全に空中に出た瞬間に後ろ脚だけで立ち上がり、今度は両前足で水棲霊長類の背中を叩いた。これにより馬は九死に一生を得るはずだった。しかし馬が畳み掛けるのと同時に、水棲霊長類も決定的な攻撃を仕掛けていた。サツと伸ばされた前鰭が馬の左前脚を掴む。ちようど鰭が軍手の

ように機能し、むんずと細い脚を捕えて離そうとしない。これにより馬はバランスを崩した。すると間髪を入れず水棲霊長類が尾鰭を振るった。正確に臍の辺りを尾鰭で叩きつけ、重心を手前へとズラす。そのはまま抱き抱えるようにして後は重力に任せ、獲物と捕食者は一つの塊となつて水中に没した。巨大な水飛沫が上がり、捕食者の勝利を知らせる。馬はなおも脱出しようと藻掻いたが、水中では自由自在の水棲霊長類が相手では勝てるわけがない。やがて喉を締め上げられた馬は口元から泡を吹いて絶命した。やがて死体は水底へと持ち去られていった。

この時の犠牲など、後の壊滅的な惨劇に比べれば微々たるものであった。

《状況》

- ・ 収容施設が陥落
- ・ 大半の生物が脱走
- ・ 近隣の牧場が壊滅
- ・ 複数の家畜が脱走

《死亡》

- ・ リークの部下5人
- ・ 水棲霊長類（メス）
- ・ 家畜（約20頭）

逃亡

焦燥が彼の声を否が応でも荒げさせる。怒りの矛先は、厄災を招いた真の首謀者へと向けられた。

「全部オマエのせいだヘレン！こうなるのが狙いだっただろう!!そのためにも私やスティーブンを利用した、そうだな!!」

容赦のない怒号を受けても、対する首謀者ことヘレン・カッターの返答は、あくまでも冷ややかだった。

「だから言ったでしょうニツク。これは『実験』よ。過去が変われば未来も変わる。互いがどのように影響し合っているのか確かめる最高にして、唯一無二の機会なのよ。それを……。：貴方も魔がなりにも科学者なら、他にもっと考えるべきことがあるんじゃないの?」

憎らしいほどの身勝手な言い分にカッターが激情で返す

「今はそんな悠長なことを言ってられる状況じゃない。人類が滅ぶかどうかの瀬戸際なんだ!君は奴らの恐ろしさを世界の誰よりも知っているはずだ。たった1頭でも歴史の崩壊を招きかねない生物が、しかも今じゃ群れだ!!」

これにヘレンは、『人類は滅びたりしない。仮に滅んでも私達が蘇らせれば良いのよ。』と悪びれる様子もなく答える。

そこへ仲裁も兼ねて電話を切り上げたスティーブンが加わった。

「悪いが話を聞いてくれ。さつきコナー達と連絡が繋がった。みんな無事らしい。何でも今は、レックスを取り戻した後に本部へと向かっているんだと。もちろん車でだ。だけど銃火器の類いの持ち合わせが少ないらしいから、時間との勝負になりそうだ。もし万が一にでも、あの薄気味悪いコウモリ共に捕捉されれば――」

これにはカッターも顔色を悪くせざるをえない。しかし流石に亀裂調査メンバーの主任だけあつて、その頭の回転は早かった。

「とりあえず我々も本部へ急ごう。今は一刻を争う。こうなった以上は君にも協力してもらおうぞ、ヘレン。」

ヘレンはまたしても薄黒い微笑を浮かべ、白とも黒ともつかない台詞を吐く。

「…イヤだ。と言ったら？」

『有無は言わせない。』愚問に構っている時間などなく、カッターはかつての婚約者を冷たくあしらう。

「…君の身柄はレスターへと引き渡す。その後についても、私は一切の弁明をしないし、もちろん処遇のレスター達に任せる。」

『何か言つてよ』と言わんばかりの目で見つめられたステイブンだが、流石に今度ばかりは異論の挟みようがない。小さく、それでいて確かな相槌を送る。

「愛想尽かされた、つて訳ね。どのみちこの怪我じゃ逃げるに逃げられないわ。行きましょ。」

見ればヘレンの肩には真っ赤に染まった包帯が巻かれている。簡易的な手当てだが、この怪我では周囲の狩人を引き寄せるのは時間の問題だろう。例えこの二人を振り切れても、半日と経たず冷たくなっている。いかに彼女が優れたタイムトラベラーだとしても、無茶が過ぎる。車が走り出し、発車の衝撃で外れかけのサイドミラーが道路へ転がり落ちる。

カッターらに知る由もないが、そこには不吉な“追跡者”が映り込んでいた。

* * *

背後から延々と届く悲鳴をBGMに、数頭のコウモリが丘向かいの宿舎へと向かう。未だ狂乱冷めやらぬ楽園を後にた彼らの歯爪は、姿なき楽園の主へと向けられていた。目には見えずとも、心臓の鼓動が嫌でも脳髓まで届く。これでは自分から『殺してくれ』と言っているようなものだ。おまけに前方からは騒々しい機械音や従者の咆哮も木霊している。どうやら従者と思しき獣は、中の主人へ必死に危険を知らせようとしているらしい。悲しいかな。それに対する答えは沈黙だけ。手練の殺人鬼がこの好機を逃すはずがない。背骨と前腕を屈伸させて力を蓄え、それを一気に開放することで時速125kmもの超スピードを実現した。現代において地上最速の肉食獣である

チーターでさえ、最大でも時速110kmしか出せず、それさえも約10秒しか持続できない。ところが、この未来の生物兵器に人類の常識は通用しないのだ。この矛盾を紐解く鍵は、捕食者の細く引き締まった身体に秘められていた。

コウモリの体重は平均500kgに達する。だが見かけでは到底それほどの体重があるようには思えない。真の秘密は筋肉と骨格に隠されていた。彼らの全身を包む筋肉は通常の哺乳類と異なり、その密度が――とある大学生によって推定された値――他種4〜5倍となっている。文字通り引き締められているのだ。それに支えとなる骨にも細工が施してある。通常のコウモリでは飛行に適應するため骨の内部が空洞化し、これによって体重の大幅な削減が可能となっている。これは進化した未来のスーパーコウモリでも同じだが、重要なのは空洞化された箇所。移動や攻撃に使われる四脚の骨には空洞化が施されており、これによって少ない力でも楽々と脚を自由自在に振り回るのだ。それに対して胴体、とりわけ背骨と胸骨の体密度は非常に高い。これは重心の位置を身体の一点へ集中させるための秘策だ。要は振り子と同じ仕組みである。纏まった重量を起点とすることで、残る手足を最大限活用した振り子運動を実現するのである。別に鉄棒よろしく吊り下がって遊ぶのではない。彼らは、まず周囲の立体物へ硬質な爪を引っ掛け、その掌の微細なシワを壁面の凹凸に密着させる。こうすると圧力の関係で手が外れない。手が一瞬だけ固定されたタイミングで、後脚をバネ仕掛けのように動かす。同時に固定していた手の力を緩め、さらに相反する動きで肘と肩の筋肉を開放する。するとコウモリの身体は弾丸を思わせるスピードで射出され、十数m離れた標的まで軽々手が届くのだ。

疾風が木柵をぶち破り、レンガ塀を苦もなく飛び越える。先程から超音波を捉えていた牧羊犬は、いよいよ迫り来る死神を前に竦んでしまった。気丈にも一匹が空元気の咆哮で威嚇するも、耳障りとばかりに一蹴されてしまう。運悪く宿舎の方へ逃れていた家畜は再び異能の力に晒される。今度はすんなりと逃げられそうにない。先程は群れの仲間が生贄となってくれたので、歩みの遅い彼らでも逃れる隙が

生まれた。しかし今や仲間も少なく、おまけに隠れ家を求めて不慣れな人宅に入り込んでしまっている。そして庭には忠実な番犬。ここに進退窮まった。まさに『前門の虎後門の狼』と言ったところだろう。しかも前に立ちはだかつているのは、虎ですら10秒と持たずに惨殺される程の化け物である。

そのころ牧場主は、依然として敷地内が地獄絵図となっている事に気付いていなかった。呑気にもリビングのソファアに腰掛けながらのドラマ観賞。どうやら長編スリラークワイエット・プレイスに浸っているらしい。よほどのお気に入りらしく、食い入るように観ているが、よもやこれから彼自身が、全く同じ目に遭うとは夢にも思っていないらしい。無理もない。何せ死因は、この現実世界に存在しえないはずの鉤爪なのだから。

それでも普段なら外の絶叫なり倒壊音に気付けたはずである。それで只事ではない事を早急に察知し、狐狩り用の猟銃を片手に外のバンに乗り込んでエンジンを掛けていけば……。一縷の望みくらいはあつたのかもしれない。

ところが近頃の彼は少々浮かれていた。というのも、ここ最近家畜の注文が激増した事で大儲けしていたのだ。最初は例の取り引き先の要望によつて肉牛を買い揃えていたものの、金に余裕が出来れば他の家畜にも手を出し、今や大小10種以上の動物が敷地で自由気ままな日々を送っている。なんでも買い手は相当の大金持ちらしく、その後もありとあらゆる牛、馬、羊、山羊、鳥類を買い漁っていた。それに頻度も尋常ではなく、多いときには数日に一回のペースで家畜を買いに来た。少し変わっていたのは取引の存在を隠す事。その詳しい理由は教えてくれなかったが、この際どうでもよかった。前々から纏まった金が欲しかった牧場主にとって、新たなお得意様クリは格好の金蔓となっていたのである。

本人は知ってか知らずか、世界を揺るがす陰謀に加担していたのである。そして『因果応報』は、英国でも通じる。ようやく迎えた映画のクライマックスシーンへ横槍を入れられた。せつかく恐ろしい怪物が知恵と火薬により撃ち倒されるといふのに、一体誰が邪魔をした

のか？イライラを募らせた彼が立ち上がると、目線は無理もなく窓際へ走った。

そこあったのは画面越しにしか存在しないはずの血溜まり。まさか映画の見過ぎで幻覚でも見たのかと思うも、さすがに考えすぎだと理性が告げる。恐怖のあまり食べ欠けのスコーンを落とした彼は、急いでリビングを後にした。急いで玄関へ向かい、ロッカーを叩き開けて中の猟銃を取り出す。これは最終手段だが、命には換えがけないのだ。迷いはない。装填と身支度を整え、玄関へ向う。今や残虐な何者かが家の敷地、いや間違いなく屋内に潜んでいるのだ。しかも血溜まりを一目見れば分かるとおり、餌食となればフィクションさながらの惨たらしい末路を辿るのは間違いない。『殺るか殺られるか。』熊どころか狼すら絶滅させてしまった英国では、久しく使われることのない狩りの代名詞である。こちらは銃火器、相手は異能の力。どちらが勝つのかは分からない。おそらく逃げようとしても背後から襲われてB A D E N Dまっしぐらだ。戦うより他に道はない。

牧場主は銃弾を装填し終え、いざ決闘の幕を開かんとリビングのドアを蹴破ろうとした。その時だった。彼は致命的な事に気が付いたのである。にわかには鳥肌が立ち、冷や汗がシャツをぐっしよりと濡らす。

「リビングのドアが開いている」

閉め忘れたわけではない。この非常事態に身の安全を疎かにするほど彼の頭は鈍くない。彼はたしかにリビングのドアを閉めたのだ。なにせ相手はリビングの窓ガラスを割って侵入している。ならば当然リビングに潜んでいるはずだ。具体的な場所こそ分からないが、それでも部屋ごと隔離してしまえば問題ない。——もつともガラスを一撃で破壊するような化け物なのだから気休め程度にもならないだろうが。

そのドアが開いているのだ。これ以上の恐怖はない。玄関の広さなどたかが知れている。これらが意味するところはただ一つ。

そして牧場主は死んだ。銃声どころか叫び声も残せずに。きつとコウモリ達にとっては退屈も良いところだったに違いない。それは

さながら世界の未来を暗示する様相だった。薄気味悪いせせり笑い。それすら破滅への前奏でしかなかったのである。

《状況》

- ・ 収容施設が陥落
- ・ 大半の生物が脱走
- ・ 近隣の牧場が壊滅
- ・ 複数の家畜が脱走

《死亡》

- ・ リークの部下5人
- ・ 水棲霊長類（メス）
- ・ 家畜（約25頭）
- ・ 牧場主↑NEW